

こゝに又松太夫が方にては
近隣のものよりしらする
とひとしく大きにおどろ
き真弓にひつそひ宮城
之介ももろとも走り
つき丈右衛門がしがいを見る
よりしうたんすこくに
およびしが五十両の金
もなく妾しのぶが居合
せざるはいぶかしき事也と
ひやうぎまちくゝなる所へ
追人の大ぜいしのぶとかの
糸商人をひき来りま
をとこの大ぬす人をとら
へたりいざまづ前夜の
ありさまを見せよとて
二人を死がいのもとへつき
はなしおのくゝゆびざし
してのゝしりけりしのぶは
丈右衛門がしがいを見ておど
ろきまとひなげきしづ
みて正たいなくむしつ
なんもうちわすれ狂氣
のことくもだへしがかのいと
あきうどはきもをけし
たゞくあきれてながめ

ゐたり松太夫父子これを
見てうたがひもなき不義もの
と**総身**よりおつとりこめふみつ
たゞきつさいなみてはく状せよと
のゝしれどももとより兩人おぼへなき
ことなればせうこをひいていひひらく
しからばとて宮城之介かのものが

柳ごりをうちあけ見るにあんの
ごとく金五十両過不足もなく
ありければいよく人ごろしに
きはまれりなんぢらことばを
たくみあらそふとも天道いか
でかゆるし給はんためしなき
ごうあく人とすぐさま代官所へ
ぞうつたへけるもこの五十両は
糸商人かかけうりの金をとり
あつめしに
相違なしと
いへどもうた
がひかゝりし
此時なれば
いひわけ
するに
たより
なく
せんかたつきてぞ
ゐたりける

「わしやそなた
しゆのたくみ
のやうすは
し
り
ま
せ
ぬ

「ぬすんだおほへは
ゆめいさゝか

「お詫言せぬ

くはしうことば

となりの

ばいさまに

はなしました

うたがひ

はらして

下さりませ

かなしや

<

「その中の帳面に

しるして「お詫言せぬ

あらためて「お詫言せぬ

ませ

「「お詫言せぬ

やじめ

「「お詫言せぬ

にんに

五十両

ある